学術情報リテラシー教育入門
－図書館「創り」から見えてきたこと－

独立行政法人　国立高等専門学校機構
沖縄工業高等専門学校
学生課図書係
上原　恵美

今日お話する内容

１　情報リテラシーとは何か

２　大学図書館における実践

３　図書館が情報リテラシー教育に関わる意義

４　大学の目標と図書館の目標

５　おわりに－「これまで」と「これから」－

1　情報リテラシーとは何か

以下の点から情報リテラシーを考えてみる

① 定義

② 情報テクノロジーとの関係

③ 習得評価

1　情報リテラシーとは何か

①　分野・コミュニティーにより定義が異なる

「少なくとも教育の観点からは、一般的、普遍的な情報リテラシーなどは存在せず、せいぜい『情報を主体的に使いこなす能力』という程度が共通にできる定義づけであり、国・地域や組織などのコミュニティーを想定してはじめて実質的な議論が可能になる」

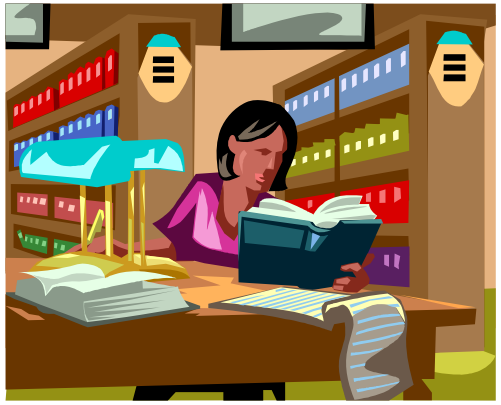
（野末俊比古”大学図書館と情報リテラシー教育：「指導サービス」の意義と展開”「変わりゆく大学図書館」p.44　勁草書房,2005）

1　情報リテラシーとは何か

①　分野・コミュニティーにより定義が異なる

図書館情報学分野

「情報が必要なときに、それを認識し、必要な情報を効果的に見つけ出し、評価し、利用することができる能力」（ALA　1989）



1　情報リテラシーとは何か

①　分野・コミュニティーにより定義が異なる

情報通信分野

「情報リテラシーはコンピュータやネットワークを利用しての知識の取り込み、そして目的のための処理に関係する能力」

「情報時代のリテラシーとはコンピュータの助けを借りて自分の考えをコンピュータが読める符号に置き換えることに基礎を置いている」

（「情報リテラシーとプレゼンテーション：電子情報通信レクチャーシリーズA-5」電子情報通信学会編,2003）

1　情報リテラシーとは何か

①　分野・コミュニティーにより定義が異なる

医学分野

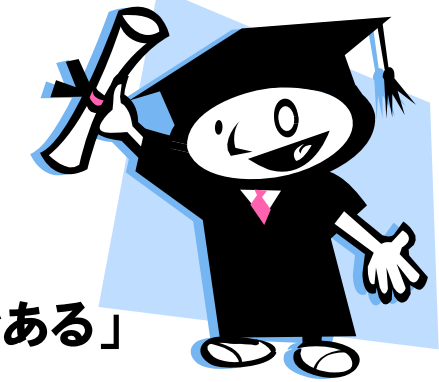
「これからの情報化社会に生きる私たちはパソコンを使いこなす能力、つまり情報リテラシーが不可欠です」

「最近では機器の操作能力に加え、数多い情報の中から自ら求める情報を検索し、その情報を的確に分析、判断、活用する能力まで含めて指すようになりました。さまざまな問題解決や計画作成にあたり的確な判断や意志決定ができるためには、このような能力が要求されます。」

（「コ・メディカルのための情報リテラシー」 佐藤憲一ほか著　共立出版,2003）

1　情報リテラシーとは何か

①　分野・コミュニティーにより定義が異なる



大学基礎科目

「情報リテラシは**個人の情報活動に関する常識**を学ぶものである」

「個人の情報活動には問題の発見、情報の収集、論理的な分析や考察、情報の創造、討論、意志決定、報告書の作成、発表がふくまれる。このような**活動を行う術を学ぶのが情報リテラシ**である」

「情報リテラシとして学ぶべき事柄は**問題発見、情報の収集、処理、伝達・発表、利用**と要約できる」

（「ITテキスト基礎情報リテラシ」第２版　魚田勝臣ほか編著　共立出版,2004）

1　情報リテラシーとは何か

②　情報テクノロジーとの関係

よくある議論

コンピュータリテラシー　＝　情報リテラシー　？？？

「情報テクノロジーを自由に使いこなす」という概念
全米学術審議会（1999）

「コンピュータ・リテラシー」は、特定のハードウエアやソフトウエア・アプリケーションの機械的学習に関係したものであるが、一方で「テクノロジーを自由自在に使いこなすこと」は、テクノロジーの根本的な概念を理解すること、および**問題解決や批判的思考をテクノロジーの利用に適用すること**に焦点を当てたものである。

(ALA情報リテラシー能力基準　2000)

1　情報リテラシーとは何か

②　情報テクノロジーとの関係

情報リテラシーは、情報を理解し、発見し、評価し、利用するための**知的な枠組み**である－それは、ある部分では情報テクノロジーを自由自在に使いこなすことによって・・（中略）・・達成される活動であるが、**最も重要なことは、批判的かつ理論的に考えること**である。

情報リテラシーは、テクノロジーを用いることもあるが、最終的にはそれに依存しない能力を通して、**生涯学習を開始し、継続し、発展させる。**

「生涯学習」への言及が見られる

（ALA情報リテラシー能力基準　2000）

1　情報リテラシーとは何か

③　習得評価

「スローガン」に止まらないために

↓

リテラシーが身に付いているか、さらにはどの程度のレベルで身に付いているかを測定・評価する

↓

情報リテラシー教育のさらなる改善のために

1　情報リテラシーとは何か

③　習得評価

（例）
ACRL/ALA
「高等教育のための情報リテラシー能力基準」(2000)
日本語訳　http://www.ala.org/ala/acrl/acrlstandards/InfoLiteracy-Japanese.pdf

1　情報リテラシーとは何か

③　習得評価

基準1　情報リテラシーを身につけた学生は、必要な情報の性質と範囲を見定める

基準2　情報リテラシーを身につけた学生は、必要な情報に効果的かつ効率的にアクセスする

基準3　情報リテラシーを身につけた学生は、情報と情報源を批判的に評価し、選択した情報を自らの知識基盤と価値観に組み入れる

基準4　情報リテラシーを身につけた学生は、個人として、あるいはグループのメンバーとして、特定の目的を達成するために情報を効果的に利用する

基準5　情報リテラシーを身につけた学生は、情報の利用とアクセスを取り巻く多くの経済的、法的、社会的な問題を理解し、倫理と法律に反しないように情報を利用する

1　情報リテラシーとは何か

③　習得評価

基準１　情報リテラシーを身につけた学生は、必要な情報の性質と範囲を見定める

パフォーマンス指標１　情報リテラシーを身につけた学生は情報に対するニーズを定義し、明確に表現する

主な成果１　研究のトピック、あるいは他の情報ニーズを確認するために、クラス討論、学生同士の作業グループ、電子的討論において指導者や参加者と協議する。

２　情報ニーズに基づいて論題を展開し、論点を定式化する。

（後略）

リテラシーを身につけた結果としての行動・成果

2　大学図書館における実践

①　これまでの流れ

図書館利用指導（参考調査業務の一環）

1996「大学図書館の電子図書館的機能の充実・強化（建議）」（学術審議会）の中で「情報リテラシー教育の支援」が盛り込まれる

1998　京大等で情報リテラシー教育を掲げる授業を実施開始

1999　東大等でWeb上の教材提供開始

2003　NIIで学術情報リテラシー研修始まる

2004　いくつかの国立大学の中期計画に図書館の情報リテラシー教育支援が明文化される

2006　長岡技大の高等専門学校向け「図書館情報シンポジウム」のテーマとして「情報リテラシー教育」を取り上げる

1989　情報リテラシーの定義（ALA）

1995～　インターネットの利用者拡大

2002～　電子ジャーナル本格導入開始

2004　国立大学法人化

２　大学図書館における実践

②　実践のためのツール

（例）

「図書館利用教育ガイドライン－大学図書館版－」
（JLA,1998）

同年、ALAでは情報リテラシーの定義が行われている

［経緯］

1989　図書館利用教育実施を目指して、JLAに図書館利用者教育臨時委員会発足。ガイドライン執筆作業の委託を受ける

1993　全国図書館大会にて素案公表

1998　JLA常務理事会で承認

２　大学図書館における実践

②　実践のためのツール

「このガイドラインは、図書館員が情報を扱う専門職として、今、社会で強く要請されている情報リテラシー（情報活用能力）の育成に携わることを宣言し、その方策を提言するものである。」

「（情報リテラシー教育の）実践場所として、図書館は最適な施設」

（JLA図書館利用教育委員会編「図書館利用教育ガイドライン合冊版－図書館における情報リテラシー支援サービスのために」 JLA,2001）

２　大学図書館における実践

②　実践のためのツール

マネジメントすべき１０項目

1理念の確認

2組織の確立

3現状の分析

4目的・目標の設定

5方法・手段の設定

6財政の確立

7担当者の採用と研修

8施設・設備・教材広報手段の提供

9協力体制の確立

10評価の定着化

２　大学図書館における実践

②　実践のためのツール

目的・目標を5つの領域で明文化

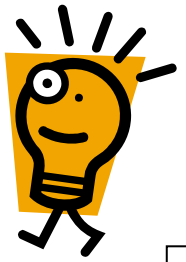
領域1　印象づけ

領域2　サービス案内

領域3　情報探索法指導

領域4　情報整理用指導

領域5　情報表現法指導



実践におけるヒント

各領域ごとに提示

○　実践の方法例

○　評価の指標例

実践の企画・戦略と評価　→　**プロジェクト管理**

２　大学図書館における実践

②　実践のためのツール

具体的には･･･

領域	目標	方法	評価の指標例
１　印象づけ （以下略）	1.図書館は生活･学習･研究上の基本的な資料･情報の収集･蓄積･提供機関 2.図書館は資料･情報の受信･発信･交流の拠点 （以下略）	1.ポスター、ステッカー、ちらしなどによる図書館の存在のアピール 2.パンフレット、リーフレットの配布 （以下略）	1.新入生オリエンテーション参加率 2.利用率(学部生、大学院生、教職員、･･･) （以下略）

３　図書館が
情報リテラシー教育に関わる意義

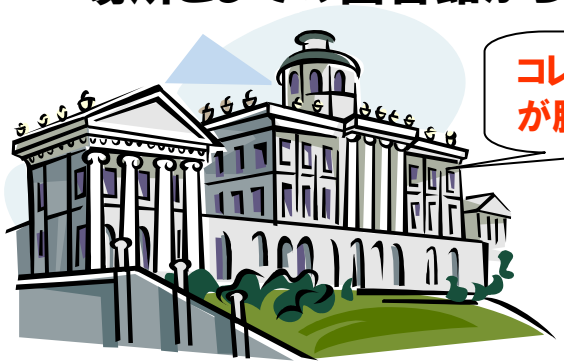
①何のために図書館が設置されているか？

キーワード

「とりあえず・・・」から「なぜ・・・？」へ

現象

場所としての図書館から・・・



コレクションの多さが勝負！

ハイブリッドライブラリーへ

学習メディアの多様化

情報アクセスの拡大

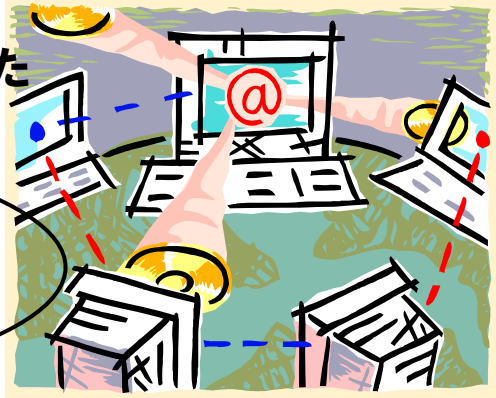
３　図書館が
情報リテラシー教育に関わる意義

①何のために図書館が設置されているか？

変化の理由

学習メディアの多様化に対応する必要が生じた

図書館は多様な
情報メディアにアクセス可能な
学習空間



３　図書館が
情報リテラシー教育に関わる意義

①何のために図書館が設置されているか？

図書館は学習空間として存在

それゆえに・・・

- **教材、情報アクセスを保証する必要性**
- **学習の進捗を適切にサポートするための機能が必要**
- **情報リテラシー教育の必要性が生じる**

３　図書館が
情報リテラシー教育に関わる意義

②では、学習はどのように行われるのか？

大学が定めるカリキュラムによって実施される

カリキュラムは大学の目標・方針により決定される

図書館の情報リテラシー教育も、大学の目標や方針とリンクするべきではないか？

４　大学の目標と図書館の目標

①大学の目標・方針を知る

大学の目標・方針を知るためのツール

たとえば、米国の大学および図書館のWebサイトにはMission Statement
や年次計画などが公開されている

単にスローガンではなく、目標（Goal）や計画（Plan）、具体的な行動（Action）、
評価（Evaluation）も表記されている

社会への情報公開に止まらず、
所属構成員に向けての大学の意志表明でもある

４　大学の目標と図書館の目標

①大学の目標・方針を知る

日本の国立大学の場合は、法人化にあたって各国立大学法人毎に「中期目標・中期計画」の策定が求められた

- 国立大学の存在理由と目標の意識化
- 社会からの「投資」（税金）に対して活動目標と活動成果に関する説明責任
- 自己および第三者による「評価」のための指標

図書館も含め、大学の各業務は「中期目標・中期計画」に基づく展開が求められていることを再認識しよう

４　大学の目標と図書館の目標

②大学の目標・方針に沿った業務展開をするということは・・

大学の目標と図書館の目標の繋がりを意識　→　目標と成果を意識した業務発想へ

現実のニーズに対応した図書館業務が展開できる　→　常に業務の最適化が可能に

学内他機関の教職員と協働するための基盤作りができる　→　連携とシナジー効果

学内共通言語：中期目標・中期計画

- 学内および学外へ図書館の理解を深めてもらうことにつながる
- 学内関連機関との連携を図り、相乗効果を生み出す可能性が高まる
- 外から見た「図書館のイメージ」とのギャップを埋めることが期待できる

４　大学の目標と図書館の目標

③再度、図書館の情報リテラシー教育の展開

図書館が大学の目標・方針を意識することにより

- 分野・コミュニティーにより定義が異なる情報リテラシー教育に関しても、カリキュラムという点で教員と図書館の連携・共同開発の展開がとりやすくなる
- カリキュラムやサービス対象者を意識した情報リテラシー教育として、常に改良・改善が図られるようになる
- 図書館を学内の情報リテラシー教育の一拠点として位置づけることができる

5　おわりに―「これまで」と「これから」―

①大学での経験

1990年代後半に情報リテラシー教育に携わる

「情報リテラシー」という言葉そのものが新しい

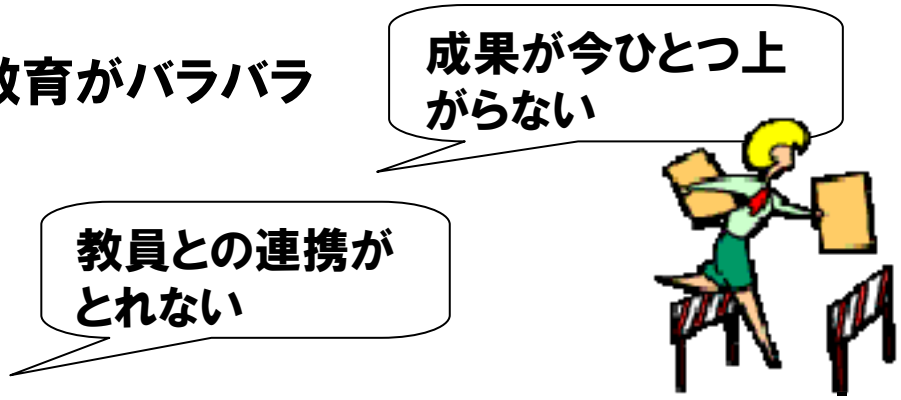
電子資料の利用率アップを最優先課題とした情報リテラシー教育

Challenge

「情報」に関する感性を育む教育がバラバラ

ニーズがうまく把握できない

業務のマンネリ化

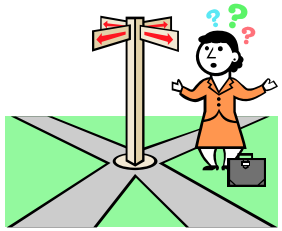


５　おわりに－「これまで」と「これから」－

②新設校の図書館創りから学んだこと

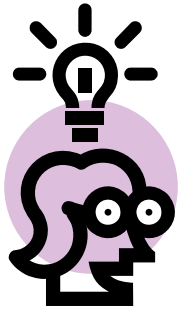
図書館職員は2人（初年度１人）、「ILL」という言葉が通じない職場

サービス対象は１５歳から６３歳まで



何に基づいて業務したらいいのか？

「図書館」の固定概念の壁に阻まれる



業務説明、予算獲得、企画・・・図書館のことを知ってもらうために、中期目標・中期計画をベースに共通言語で議論しよう！

5　おわりに－「これまで」と「これから」－

③これからのこと

学習空間の拡大

学習メディアの多様化がますます進む（e-learningなど）

学習におけるコミュニケーション環境の拡大

大学の研究成果（研究情報）の公開促進

↓

大学の情報管理・情報提供機関としての図書館の変革が進む

5　おわりに―「これまで」と「これから」―

④さいごに

「中期目標・中期計画」は**変化していきます**

情報リテラシー教育に限らず

学習空間としての図書館のあり方を、「大学」という視点で再定義し続ける中から、図書館本来の役割を認識できるということを学ぶ

ご静聴ありがとうございました

私はまだまだ「なぜ？」の連続です。

みなさんも、「なぜ？」を手がかりに、毎日の仕事を見つめてみませんか？

参考文献

以下の資料も参考にしました・・

「情報を使う力」P.ブレイビク、E.G.ギー著（勁草書房,1995）
「アメリカの大学・カレッジ」E.L.ボイヤー著（玉川大学出版部,1996）